

## レゴ®シリアスプレイ®を活用した作文指導

— 小学校国語科との関連をふまえて —

Teaching Composition Using LEGO® SERIOUS PLAY®

— Based on Elementary School Japanese Language Studies —

山 田 範 子

Noriko YAMADA

### 1. 問題の所在 — 短大生の入学直後の文章から —

2018年度より、短期大学部1年次前期必修基礎科目「日本語表現法Ⅰ」を担当している。5年目となる今年、これまで漠然と抱えてきた違和感に向き合うため、入学直後の学習者が書く文章に、どの程度誤用があるか調査することにした。

初回の日本語表現法Ⅰの授業で、筆者がアナウンサー時代<sup>1)</sup>に得た音声言語表現の要点を紹介し、それを聞いてどのようなことを考えたか600字程度で書くレポート課題を出した。提出されたレポートを分析したところ、約73%の学習者が、本来「書き言葉」で書かなければならないレポートに「話し言葉<sup>2)</sup>」を使用していた。中でも、顕著だったのが「すごいなと思いました」「就活で活かせたらいいなと思います」といった、「感動」を示す終助詞「な」の使用である。文章中に話し言葉を用いた学習者の約59%が、「感動」を示す終助詞「な」（以下、終助詞「な」と記載）を使用していた。

短大生の書き言葉と話し言葉の実態を調査した皆川（2016）は、「自分の気持ちを述べるときに『～な』『～なあ』と書く学生が多い<sup>3)</sup>」と指摘した。また、終助詞「な」を含む話し言葉を、書き言葉へ修正できるかどうか調査した際、正しく修正できない短大生の割合が高かったことから、「『～だな』という表現が話し言葉であるという認識が薄いようである<sup>4)</sup>」と報告した。このように、本学の学習者に限らず、短大生全般において、書き言葉と話し言葉の区別がつきにくく、終助詞「な」を文章に用いて自分の気持ちを述べる傾向があると言える。

ところで、終助詞「な」は、話し言葉であると同時に、書き手の幼さを印象づける。国内で最も規模が大きいと考えられる「全国小・中学校作文コンクール」で、2021年度（第71回）文部科学大臣賞を受賞した作品の要約に注目したところ、終助詞「な」は、小学校低学年の受賞作品に6回、小学校高学年に5回、中学校に2回出現していた。一例に過ぎないが、年齢の低い学習者の作文に終助詞「な」が出現しやすいことが示唆された。ただし、幼さは評価の対象でも考えられる。もちろん、終助詞「な」の使用が作文コンクール受賞の拠り所であるはずがないが、心情をありのままの言葉で、素直に表現している点では、子どもらしい作品と評価できるのではないか。

短大生が書く文章には、話し言葉、それも幼さを印象づける終助詞「な」の使用頻度が高いことが明らかになった。筆者の抱いた違和感は、短大生という成人が提出するレポートに子どもらしさは必要かという問題であった。

## 2. 小学校国語科における作文指導の課題

短大入学直後のレポートから見てきたのは、高等学校までの学習経験において、文章における終助詞「な」の使用が許容されてきた可能性である。学習者の作文に対して適切な指導が行われず、話し言葉の使用が黙認されてきた恐れがある。また、終助詞「な」は心情を表現する場合に出現するため、これまで書いてきた作文が情緒的文章に偏っていたと推測できる。あるいは、遠足の思い出などの情緒的文章を多く書く小学生時代の作文指導の印象が強く、当時評価された子どもらしい表現をずっと引きずっているとも考えられる。

西山(2021)は、「小学校には論理的文章(説明的文章、説明文)を書く力が身につかず、書くことに自信をもてない児童が多く存在している<sup>5)</sup>」と述べた。また、篠原(2021)は、「小学校国語科の授業の時間を有効に活用して、論理的に『書くこと』の基礎を身につけさせ、子どもたちの論理的思考力・表現力の向上を図りたい<sup>6)</sup>」と述べ、「そのための方法の一つとして、小学校からの小論文指導を提案<sup>7)</sup>」した。このように、これまで小学校国語科で情緒的文章を多く書かせてきた作文指導が問題視され、現在は論理的文章の指導が強化されている状況がある。

短大生がこれまで受けてきた学習経験のどこに問題があったのか特定することは難しいが、小学生時代、情緒的文章に偏った指導が行われていたと推測される本学1年次学習者のレポートに、当時から使用してきたと考えられる終助詞「な」が頻出していることから、作文教育の課題を克服するためには、小学校国語科に立ち返る必要があると考えた。

## 3. 本研究の目的とレゴ® シリアスプレイ®

本研究の目的は、短大生である本学学習者の文章作成における課題を克服する授業を計画・実践し、その成果と課題から小学校国語科への汎用性を検討することである。

本学学習者の文章作成における課題を解決するためには、なぜ終助詞「な」が頻出するのか考える必要がある。理由として、多くの学習者が文章構成を検討することなく、レポート課題の規定の文字数に到達するために、口語的にただ空欄を埋めるような書き方をすることが挙げられる。成人した学習者のレポートに終助詞「な」が頻出するのは、書く際に発話のように思いついたことをそのまま述べるからであり、その結果、幼い印象の文章になっているのではないか。すなわち、本学学習者の根本的な課題は、全体を見通しながら論理的文章を書く力が弱い点であると考えられ、現在の小学校国語科が抱える作文指導

の課題に重なる。そこで、今回の授業では、何が書き言葉で、何が話し言葉かといった部分的な区別をつけるのではなく、筋道を立てよく考えて書くことに注目したいと考えた。

他方で、本学のディプロマ・ポリシーには「協調性」「コミュニケーション力」が身につけていることが挙げられるため、個人で構成を考えるだけでなく、グループで思考を整理しながら書く活動を計画した。同時に、小学校国語科への汎用性を検討する観点から、小学生でも楽しんで意欲的に学べる作文教材を探った。このような経緯でたどり着いたのがレゴ®シリアスプレイ®である。

日本におけるレゴ®シリアスプレイ®のプログラム開発を行う「株式会社ロバート・ラスムセン・アンド・アソシエイツ」のホームページには、レゴ®シリアスプレイ®の特徴を次のように説明している。

LEGO® SERIOUS PLAY®は、遊びと学びの融合の中に、問題解決のプロセスを巧みにおり交ぜた、「新しい学びの道具」といえます。大人でも子供でも、世代や上下関係を超えて、参加できるのが特徴です。

チームの個々人が、自分の考えを素直に表す、また、他のメンバーから、多角的な視点で自らの考えに啓発を受けるのが最初のステップです。チーム全体が、このプロセスを共有することにより、個々人の考えが、次元の高い、ダイナミックな考えへ統合・昇華することができます<sup>8)</sup>。(傍線は筆者)

町田(2022)が「興味・関心を抱くことができるような教材を用いることによって、学習者は授業に関心を寄せるようになる。それが学びのきっかけとなれば、授業内容へといざなうことはさほど困難ではない<sup>9)</sup>」と述べるように、授業開発においては教材そのものに楽しさやおもしろさがあることが重要である。その点、レゴ®シリアスプレイ®を教材化することで、「遊びと学び」を融合することができる。また、「大人でも子供でも」参加できるブロック遊びプログラムは、短大生と小学生という大きな年齢差がある学習者を対象とした今回の研究に適している。そして、「個々人の考えが、次元の高い、ダイナミックな考えへ統合・昇華」できることから、個人の論理をグループの論理へと移行できる授業内容によって、協調性やコミュニケーション力を駆使できると考えた。しかし、ブロックを教材化し、国語科教育や作文教育に活用した先行研究が存在しなかった。

一方、レゴ®シリアスプレイ®は、企業研修やまちづくりのワークショップで、チームで自由にイメージを出し合い、それを共有するためのプログラムの一つになるため、本学の併設校である金沢星稜大学経済学部の授業ですでに活用されていた。そこで、経済学部経営学科の野口将輝准教授に、ブランド論の授業でどのようにブロックを扱っているか教えていただき、それを参考に作文指導におけるレゴ®シリアスプレイ®教材化の可能性を模索した。

#### 4. 授業計画

レゴ® シリアスプレイ®（以下、ブロックと記載）制作を通して、協調性とコミュニケーション力を働かせ、論理的な文章を書くことを授業の目標とした。

ブロック作品のテーマは「理想のスーパービジネスウーマンの日常」とした。経営実務科で学ぶ本学の学習者は、卒業後、公務員や民間企業などの事務職に就く割合が高く、一人ひとりビジネスウーマンとしての理想の人物像を持っていることが予想され、意欲喚起できるテーマであると考えた。しかし、それは頭のなかにぼんやりと抱く思考で、具体的な言葉になっていない。そこで、ブロックで思考を体現化することによって、言葉を生み出すことをねらった。

4人グループで「理想のスーパービジネスウーマンの日常」という作文を完成させるために、ビジネスウーマンが8時、12時、16時、20時頃に何をしているか想像し、グループメンバー一人ひとりがブロックで表現した。例えば、「理想のスーパービジネスウーマン8時」をAさんが担当するとしたら、Aさんのイメージでブロックを作り、それを見ながら作文を書く。このように、時系列の作文を個人で書き上げた後、グループ間で意見のすり合わせを行うことにした。

個人でブロックを作り上げる過程では論理的思考が働く。作品を完成させるために、どのブロックをどのように組み立てるか必然的に考えることになる。これは、文章の全体像を見通して作文を構成するときの思考に類似しており、ブロック制作を通してストーリーの筋道を検討することと同義である。

グループでは、個人で完成させた作品への質問・応答を通して、ブロックで体現化した思考を言葉に変換させる。また、そこで出てきた言葉を単語レベルで記録しておき、作文を書くときのプロットとする。さらに、個人で書いた作文を時系列に並べ、一つのまとまりのあるストーリーに統合させるとき、協調性とコミュニケーション力が働く。従って、ブロックを教材とすることで、授業の目標を達成できると考えた。以下に、全3時間（90分授業）の授業計画の概要を示す。

##### <第1回>

- ① 4人グループになり、ブロックを受け取る。
- ② 授業内容の説明を聞く。
- ③ 担当を決め、「理想のスーパービジネスウーマン8時・12時・16時・20時」のブロック作品を作る。
- ④ 作品が完成したら写真撮影し、「dotCampas<sup>10)</sup>」に投稿する（複数回にわたる授業だったため、ブロック作品を留めおくことができず、写真撮影した）。
- ⑤ グループメンバーに作品の説明をする。グループメンバーはさまざまな観点で質問をして、それに答える。そのとき出てきた言葉を単語レベルでメモしておく。

<第2回>

- ① 自分が担当したレゴ作品を振り返り、それに対応するストーリーを考えて書く。
- ② 個人で考えた「理想のスーパービジネスウーマン〇時」のストーリーをグループメンバーに伝える。
- ③ グループメンバーと意見をすり合わせ、「理想のスーパービジネスウーマンの日常」という一つのまとまったストーリーを書く。

<第3回>

- ① 第1回目に撮影した写真を示しながら、作文発表会をする。
- ② 授業の感想などをアンケートフォーム<sup>11)</sup>に提出する。

## 5. 授業の実際と考察

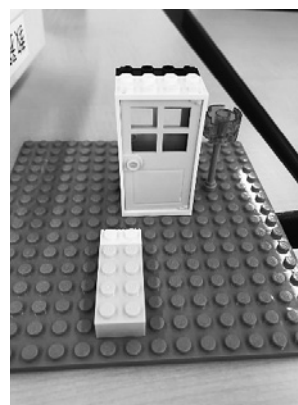
2021年度後期選択教養科目「日本語表現法Ⅱ」において実践した。この科目は、月曜日2限と金曜日2限に開講し、履修者はそれぞれ39名と29名であった。

授業展開で注意したことは、はじめてブロック作りを通して作文を書く学習者に対し、戸惑いや不安感を与えないことである。ブロックは精巧に作るのではなく「この赤のブロックが上司」など、まずイメージを体現化することが大切であると伝えた。また、学習者の自由な発想の邪魔にならない程度の作文例を示し、どのような作文を書けば良いか学習者が理解できるように工夫した。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、予防接種による副反応や感染不安によってやむを得ず授業を欠席する学習者が相次いだ。よって、全3回の授業に4人のメンバーが全員そろっていたグループの作文の中から2作品を以下に報告する。学習者が書いた文章を原文のまま記した。また、考察する際に注目した表現に傍線を引いた。

<月曜日5班>

これは、都会に住むあるビジネスウーマンの話である。  
8時、彼女は出勤する。綺麗な容姿の彼女は、自分磨きを忘れず毎日完璧な身だしなみで準備をする。そんな彼女は、準備に2時間もかかるため6時に目を覚まし、優雅に朝食をとる。もちろん、朝食のお供は手作りのグリーンスムージーである。アサイボールと一緒に食べるパンケーキとグリーンスムージーは、絵に描いたような素敵な朝食である。そんな彼女も、電車で出勤する。自分が一番綺麗であるかのように歩くという朝のルーティンも彼女にとって必要不



8時 (Aさん)

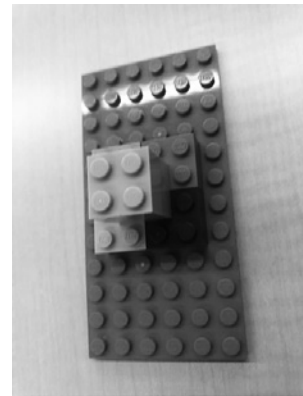
可欠である。会社に着いた頃には、彼女の仕事スイッチが入り、多忙な日常に現実を突きつけられる。(Aさん)



12時 (Bさん)

午前中に終わらせたい仕事をしっかり終わらせて、後輩からの頼まれごともしっかりこなした私は、やっとランチタイムだ！一人でゆっくり一息つきたい私にとって、お気に入りの場所は入社2年目の時に発見したこの公園である。広々と開放感のあるこの公園で、手作り弁当を味わいながら過ごすこの時間が大切なリフレッシュである。時折訪れる家族連れを眺めては、将来への妄想を膨らませている。入社したての頃はおしゃれなパン屋さんでサンドウィッチを買って食べていたが、いまは健康や金銭面の関係から手作りにこだわっている。初めはなかなか上手くいかなかった玉子焼きも今ではすっかりプロ級だ。この玉子焼きの出来具合が私の一日の気分を左右すると言っても過言ではない。鏡を出して、お気に入りのリップを塗り、「よしっ！」と気合を入れて会社に戻る。これが私の日常。(Bさん)

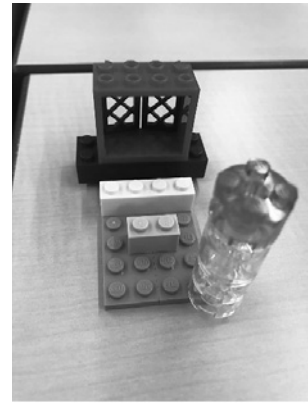
今日はいつも以上に一段と疲れた。合同会議で発表があったけど皆にうまく伝わってなかったらどうしよう。最近、毎日毎日同じことの繰り返しのような気がするけどきっと私の努力と気合が足りていないのかな！！うん、多分そうだ！！そう思うのも今だけだと信じよう！！この仕事、楽しいしやりがいを感じれるからこれからも頑張ろうと！でも、今日に関しては早く終わらないかなあ。昨日報告書を書いてて気づいたら4時であんまり睡眠できていないんだよなあ。ここ最近眠れてない気がする。寝れたとしても悪夢ばかり。きゃあ怖い。嫌だ嫌だ。今日はアロマ炊いて心を浄化したいな。早くお家に帰りたい。やっぱり1日の締めは、ビールと美味しいご飯食べてお風呂に入ってYouTubeみてベッドにダイブだな。仕事終わりのビールは1番美味しい。よし、あと少しで仕事が終わる。あと4時間頑張れば仕事が終わる。ビールと美味しいご飯とお風呂とYouTubeとベッドが私を待っている！頑張れ自分。私ならできる。アイキャンドゥーイット。(Cさん)



16時 (Cさん)

仕事帰りの楽しみは夜ご飯。会社の仲間と飲み会に行くもよし。1人飲みに行くのもよし。時には友達と朝まで飲んでマシンガントークをしているがそれも私の楽しみの1つだ。今日は朝から仕事に追われどっと疲れが出たからコンビニで何か買って家でゆっくりしよう。そんなことを思いながら今日は違う道から帰ってみようと暗い夜道を歩いていると明るく賑わった素敵なカフェを見つけた。今日1日とても頑張った

自分にご褒美をと思い、カフェでデザートを買うことにした。私の好きなチーズケーキがあったので買うとコーヒーを1杯サービスしてくれた。今日はなんだかいい日のように思う。足元も軽くなりるんで近所のコンビニに向かう。ビールはかかせない！とすぐにビールを手にとり、おつまみも買い家に向かった。家に着きドアを開けると愛犬がお出迎えしてくれた。部屋着に着替え完全にオフモードになる。今日は歌番組に好きなアーティストが出る日なのでテレビをつけるとちょうど出番だった。タイミングが良かった！と、また小さな喜びを噛み締める。ビールを飲んで気分が上がり1人ライブを楽しむ。ほんの数分だったが最高の時間だった。日々の小さな喜びが私の仕事へのモチベーションになっている。明日からも頑張ろうと気合をいれ私は眠りについた。(Dさん)



20時 (Dさん)

8時を担当したAさんは、「自分磨きを忘れず毎日完璧な身だしなみで準備」し、「絵に描いたような素敵な朝食」をとる都会的で華麗なビジネスウーマンが理想のようである。Aさんが作ったブロックは、マンションのシンプルな一室をイメージしたように見え、出来上がったブロックを見ながら文章を考えたというよりも、ブロックを作る過程やグループの質疑応答の過程で文章の構想を練った可能性が高い。

一方、Bさんは芝生、ベンチ、水飲み場などを配置した公園をブロックで作り、作文の冒頭に「入社2年目の時に発見したこの公園」と述べている。その後、ブロックには表現されていないランチタイムの描写が書かれていることから、Bさんはグループ内の質疑応答や、完成したブロック作品を見ながら言葉を紡ぎ出し、作文を書いた可能性が高いと推測できる。また、「入社したての頃はおしゃれなパン屋さんでサンドウィッチを買って食べていたが、いまは健康や金銭面の関係から手作りにこだわっている」と、庶民的なビジネスウーマン像が描かれている。もともとBさんは、8時を担当したAさんとはかなり異なった理想像があったと考えられ、このようにグループ内で大きく異なるイメージがあったとき、すり合わせが難しいことが示唆された。

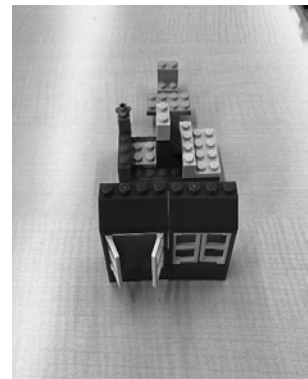
Cさんは、口語調の強い文体で作文を書いている。「やりがいを感じれるからこれからも頑張ろっと」という箇所には、ら抜き言葉と脱字が見られる。「報告書を書いてて気づいたら4時であんまり睡眠できていないんだよなあ」にも、い抜き言葉、終助詞「な」(なあ)のような話し言葉が含まれている。地の文がほとんどなく、登場人物のセリフによってストーリーが展開しているため、口語調になっていると考えられる。ただし、理想のスーパービジネスウーマン像に同化して、楽しみながら書いたことが窺われ、思考が整理できずに話し言葉を使用したのではないと推測できる。

ブロックはベッドを表現していると考えられるが、ベッドが出てくるのは作文の後半であることから、前半部分はブロックと質疑応答の過程で生み出された言葉を用いていると考えられる。

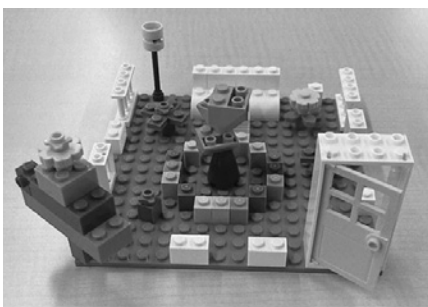
Dさんのブロックは、自宅の一室を表現していると考えられる。直前の16時を担当したCさんが「ビールと美味しいご飯とお風呂とYouTubeとベッドが私を待っている」と書いたことが影響したのかわからないが、Dさんも「ビールを飲んで気分が上がり1人ライブを楽しむ」と述べ、帰宅してビールを飲むビジネスウーマン像を描いている。ライブはテレビで観た設定になっているので、Cさんとやや異なるが、それでもある程度の考えのすり合わせがあったことで、一つの作品としてうまくまとまったように考えられる。

<金曜日1班>

私はスーパービジネスウーマン。窓から差し込む朝日が眩しくて目が覚めた。小鳥のさえずる声が聞こえる。気持ちよい太陽の光を浴びると仕事への活力が湧いてくる。これがスーパービジネスウーマンの秘訣だ。今日も一日がんばるぞ。ベッドの横の花に水をやると、葉から落ちるしずくがキラキラ光っている。顔を洗って身支度をすまし、キッチンへ向かう。朝ごはんは何にしようかな…。冷蔵庫を開けて卵とバター、牛乳、食パンを取り出し、スクランブルエッグとトーストを作った。スーパービジネスウーマンは料理を作る手際も味もいい。出来たてのトーストを頬張りながら、テレビでニュースチェックをする。常に最新の情報を集めるためだ。最近はおミクロン株が出てきて、コロナが大変らしい。私の会社もまたリモートになるかもしれない。そのための準備も一応しないといけない。朝ごはんを食べ終わったので歯磨きと化粧をし、荷物をまとめ家から出た。家から職場まではとても近いので歩いていく。道には私の他にも出勤しているのだろうサラリーマンらしき人が何人かいた。皆やる気に満ちたイキイキとした顔をしている。自分も負けていられないと思い、気合いを入れ直して会社に向かった。(Eさん)



8時 (Eさん)



12時 (Fさん)

今日は、前から約束していたユナとのランチ！私がずっと行きたかった六本木のホテルの屋上にあるコースランチ。ちょっとお高めだけど毎日頑張ってる自分へのご褒美に贅沢しよう！

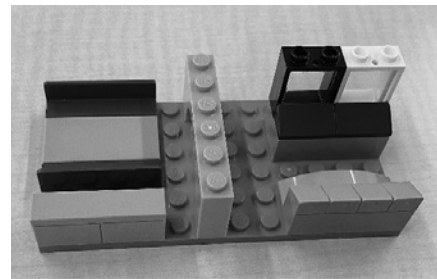
私は特製ローストビーフを、ユナはフレンチフライと黒トリュフのコースを頼んだ。店の雰囲気は落ち着いていてゆったりできるスペースもあり



コースランチだけど、気軽に利用できそうな感じもある。ディナーで来るとカジュアルにシャンパンが飲めそう。開放的な空間があるため、ホテルの屋上ながらも自然と日光を感じられるランチにもってこいのところだ。料理が出てくるのを待っている間はユナとの将来の話。どんな大人になりたいか、将来何をしたいかなど話を語り尽くす。将来は海外に住みたいユナと私は小さい頃からその夢を持っている。夢を語る時間が1番好きだ。同じ夢を持つ友人がいると頑張ろうと思える。ユナとはそういう話が合うため盛り上がりキリがない。そのうちに料理が出てきた。

コース料理はメインが出る前に結構お腹が膨れたりしてしまうところがあるけど今日は大丈夫そう(笑)。メイン料理が出てきて、口に運ぶ。口の中で幸せが広がる。いくらでも食べられそうなほどに美味しい。リピート決定だ。お腹もユナとの時間も満足。よし、またお仕事頑張るぞ！またランチ行こうね。ありがとうユナ。(Fさん)

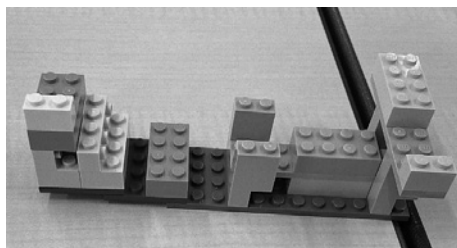
現在16時。ちょうど取引先との打ち合わせも終わって、あとは明日の会議に使用する資料を作れば今日の仕事はおしまい。一緒に打ち合わせへ参加した後輩は始まる前からすごく緊張しているようだったから少し気がかりではあったけど、打ち合わせが始まれば先方としっかりコミュニケーションを取ることができていた。彼らが入社して半年近くは経つけれど、毎日確実に成長しているのを感じる。



16時 (Gさん)

明日の資料作成は自分でやってしまった方が早く終わるだろうと思うけど、いい機会だから後輩たちと一緒に作成しながら資料作成の手順や明日の会議の流れを詳しく教えてもいいかもしれない。この先きっと彼らだって誰かの先輩になっていく訳だから、今のうちからたくさんの仕事に見て触れているいろいろな分野の経験をしていた方がきっといい。私自身も入社したばかりの頃から先輩方と一緒に多くの仕事を経験させてもらえたおかげで、ぐんとスキルアップできた。

入社して早5年。今こうしてプロジェクトリーダーを任せてもらうことができるのは、その時の経験があったからこそだ。私も先輩であるからには、彼らのスキルアップのために少しでもお手伝いできたらいと思う。さて、もうひと頑張りしようか。(Gさん)



20時 (Hさん)

仕事終わり、ストレス発散も兼ねてジムに行く。仕事中はなにかと差し入れがあり、お菓子を食べってしまうので、体型維持の為にジムに通っている。ジムでたくさんの汗を流し、今日あった嫌なことを忘れるくらい夢中になれるのでジムで運動することは私にとって、とても大

事な日課だ。ジムで運動した後、そこに併設されているサウナ、お風呂に入る。最近流行っているサウナで、みんなが口を揃えて言う、「整う」状態を体験してみたくて行っているがサウナ初心者の私にはまだ分からない。だけど、なんとなく「無」の状態になれるので好きだ。その後は、お風呂に浸かって、体を洗って、温まった状態になれば家に帰る。帰宅後はプロジェクターで今見ている韓国ドラマの続きを見る。韓国ドラマは最初あんまり面白く無いが、途中からどんどん面白くなっていき、ハマってしまう。気づいたらもう11時半だ。明日もまた早起きをして会社に行かなければならないと思うと憂鬱だが、お金がないと生きていけないので、お金のために頑張ろうと思う。明日もいい一日になりますようにと願って、寝る。おやすみなさい。(Hさん)

金曜日1班は、Eさんが8時を担当し、ここからストーリーが始まっている。Eさんのブロックは自宅を表現していると考えられ、「ベッドの横の花に水をやると、葉から落ちるしずくがキラキラ光っている」という箇所に見られるように、ベッドと花が配置されている。そのブロックから、水やりのシーンにつなげ、葉からしずくが落ちる描写を情緒的に描いている。また、「道には私の他にも出勤しているのだろうサラリーマンらしき人が何人かいた。皆やる気に満ちたイキイキとした顔をしている」といったブロックの外の描写もあり、ブロック制作と質疑応答の過程で生まれた言葉の影響が示唆される。

Fさんは、「六本木のホテルの屋上にあるコースランチ」と特定の地名を出してブロックを作った。細かい作りの作品で、高級ホテルのレストランのイメージをそのまま体現化したように見受けられる。「私は特製ローストビーフを、ユナはフレンチフライと黒トリュフのコースを頼んだ」とあるように、料理名や友人の名前を具体的に決めている。はじめから具体的なイメージがあり、それがブロックに反映されたのか、ブロックによって作文が精緻化されたのかわからないが、ブロック・作文ともに具体性の高い作品であった。

Gさんは、12時を担当したFさんが具体的な地名や友人の名前を出したことでつなぎ合わせることが大変だったかもしれないが、あまり違和感なく自分の文章を書くことができているようである。Gさんの作文には、入社5年目の先輩という設定で、後輩に対して「彼らが入社して半年近くは経つけれど、毎日確実に成長しているのを感じる」頼もしいビジネスウーマンが描かれている。ブロックでは一般的なオフィスが作られているようで、Gさんはブロックから言葉を生み出したというよりも、もともと明確な理想のビジネスウーマン像があり、その人物が働くオフィスをブロックで作ったのではないかと考えられる。FさんもGさんもそれぞれ具体性の高い作文を書いているが、Fさんの作文がオフィスの外のランチタイムに限定したものであったため、Gさんの作文にあまり影響を与えなかったと推測する。

20時担当のHさんは、「体型維持の為にジムに通っている」意識の高いビジネスウー

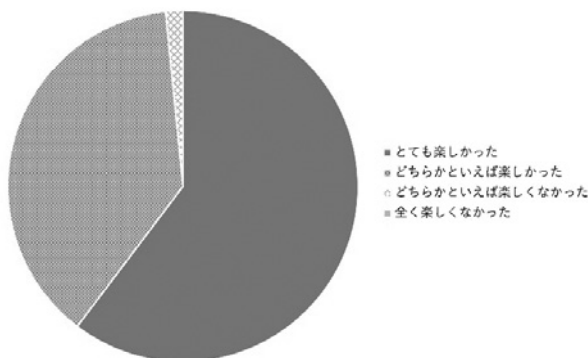
マン像を描いた。ブロックは、ジムに設置されたトレーニングマシンなどをイメージしたと本人から聞いた。作文の最終筆者は前の3人の作文の要素を引き継ぐことで、一つのまとまったストーリーに収斂させていく必要があるが、Hさんは「お金がないと生きていけないので、お金のために頑張ろうと思う」と締めくくった。これは、Hさん自身の仕事観ともとれるが、12時と16時を担当したFさんとGさんが方向性の異なるアクティブで個性的なビジネスウーマン像を描いていたため、8時担当のEさんの「自分も負けていられないと思い、気合いを入れ直して会社に向かった」という表現に注目したとも考えられる。気合いを入れ直したとあるので、少しネガティブな側面が見える。一般的に共感性の高いことを述べ、全体を調和させている。

月曜日5班、金曜日1班の作文より、学習者はブロックをすることによって、それぞれの思考を体現化できたと言える。また、ブロックで体現化した思考をグループ間の質疑応答によって整理しながら言語化し、全体を見越した論理的な文章を書くことにつながったと考えられた。一方、理想のスーパービジネスウーマン像のイメージが大きく異なった際に、グループで一つのまとまったストーリーを作ることが難しかった。ブロックをすることによって個人のイメージが確立されたため、グループの合意形成が図りにくくなったと考えられる。しかし、このような状況の中でも、ある程度の意見のすり合わせが見られた。今後の展望として、学習者のどのような発言がきっかけで合意形成が促されるのか検討する必要があると考えられた。

## 6. 学習者の反応から考える授業の成果と課題

全3回の授業終了後に、学習者に対してアンケートを行った。月曜日2限履修者39名、金曜日2限履修者29名のあわせて68名に対してアンケートを行い、63名から回答を得ることができた。アンケート項目ごとに結果を示し、すべての結果を総括して今回の授業の成果と課題を考察する。

### ① 理想のスーパービジネスウーマンの授業（全3回）は楽しかったですか。



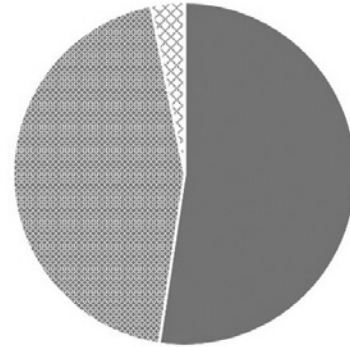
【図1】 授業が楽しかったか

「とても楽しかった」と答えたのが38名、「どちらかといえば楽しかった」と答えたのが24名、「どちらかといえば楽しくなかった」と答えたのが1名、「全く楽しくなかった」は0名だった。ほとんどの学習者が今回の授業を楽しむことができた。

② 理想のスーパービジネスマンの授業（全3回）に熱意をもって参加できたと思いますか。

「とても熱意をもって参加できたと思う」と答えたのが33名、「どちらかといえば熱意をもって参加できたと思う」と答えたのが28名、「どちらかといえば熱意はなかったと思う」と答えたのが2名、「熱意を全くもてなかった」が0名だった。

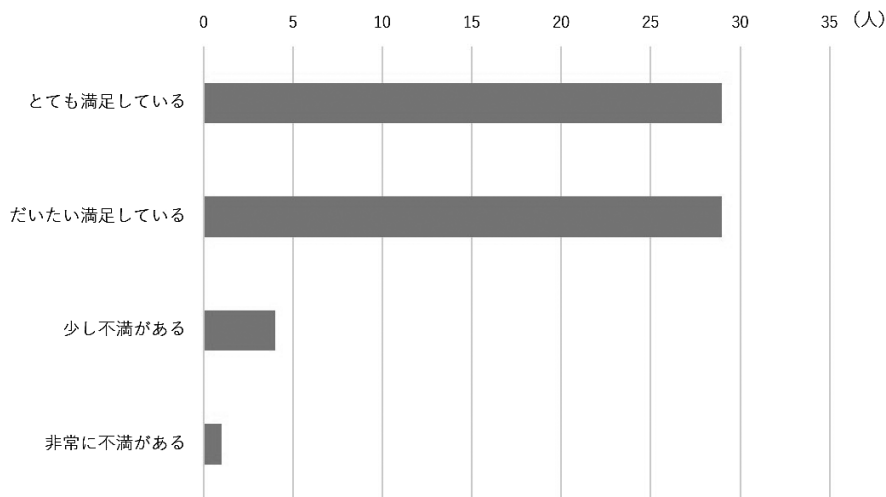
約97%の学習者が熱意をもって今回の授業に参加できたと言える。「どちらかといえば熱意はなかった」と答えた学習者は、欠席したことが原因となって熱意をやや喪失したと考えられる。



■ とても熱意をもって参加できたと思う  
 ※ どちらかといえば熱意をもって参加できたと思う  
 ◻ どちらかといえば熱意はなかったと思う  
 ■ 熱意を全くもてなかった

【図2】 熱意をもって授業に参加できたか

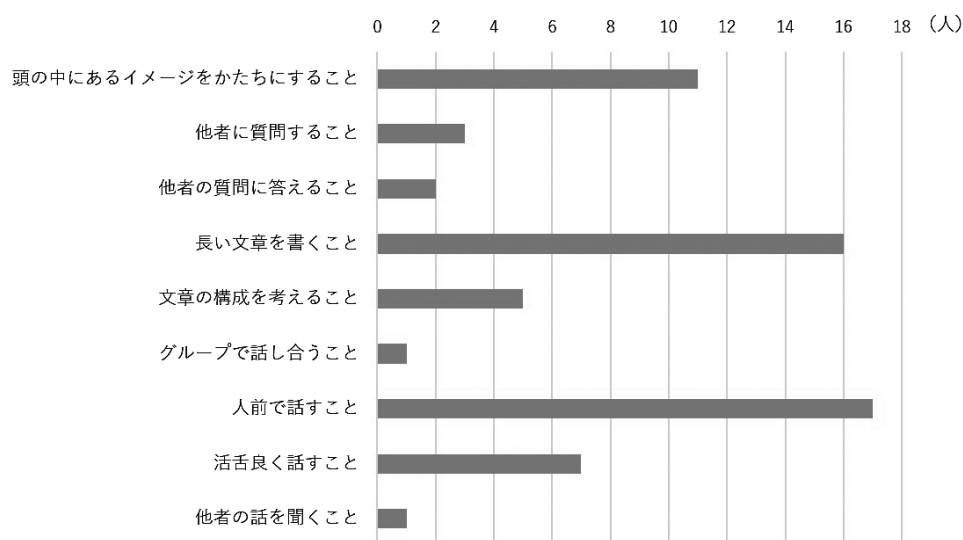
③ 自分の担当する文章（理想のスーパービジネスマン〇時）の仕上がりに満足していますか。



【図3】 自分の作文に満足しているか

「とても満足している」と「だいたい満足している」がそれぞれ29名、「少し不満がある」が4名、「非常に不満がある」が1名であった。「不満がある」と答えた学習者の一人は、欠席してブロック作品を作れなかったことが不満の理由と述べていたため、大多数の学習者が自分の作文にある程度満足感を持ったと判断できる。

④ 以下の選択肢の中であなたが最も苦手意識を持つものは何ですか。

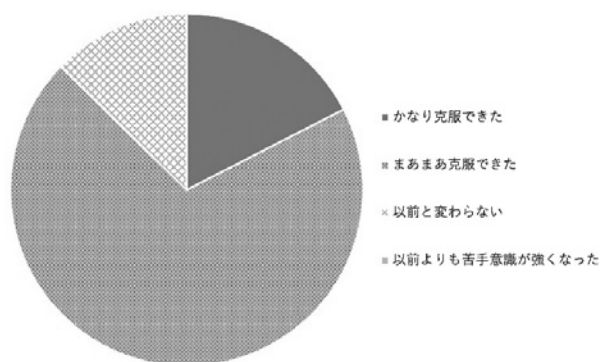


【図4】最も苦手意識があるものは何か

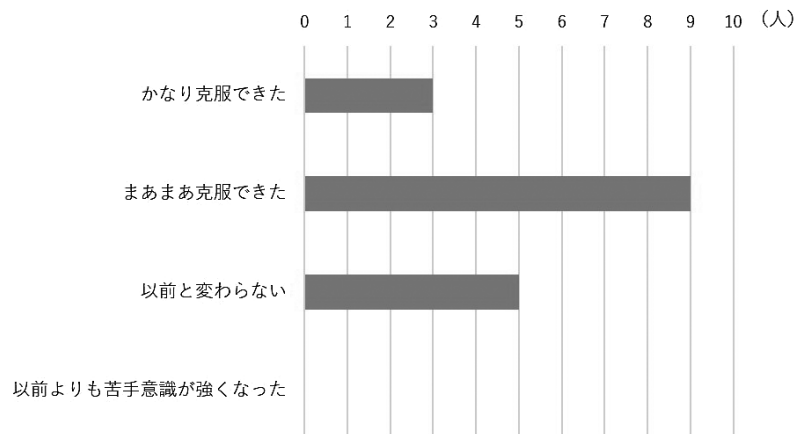
最も回答者数が多かったのは「人前で話すこと」(17名)であった。「長い文章を書くこと」(16名)、「頭の中にあるイメージをかたちにすること」(11名)と続き、これら3項目が学習者にとって苦手意識が強いと判断できた。

⑤ あなたの苦手意識は、理想のスーパービジネスウーマンの授業(全3回)の授業によって、どの程度克服できたと思いますか。

「かなり克服できた」と回答したのが11名、「まあまあ克服できた」と回答したのが44名、「以前と変わらない」と回答したのが8名だった。【図4】で特に苦手意識が強いと判断できた上位3課題に注目し、それぞれ苦手意識のあった学習者がどの程度克服できたかまとめた結果が【図6】～【図8】である。

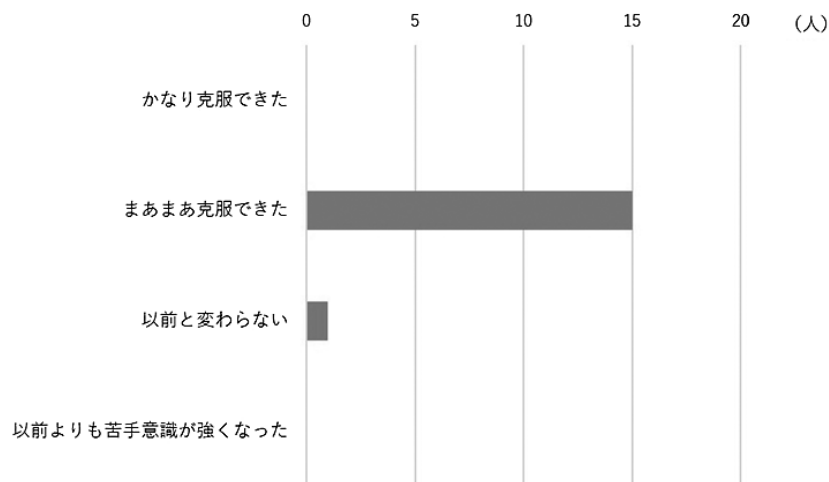


【図5】苦手意識はどの程度克服できたか



【図6】「人前で話すこと」に苦手意識のある学習者の克服度

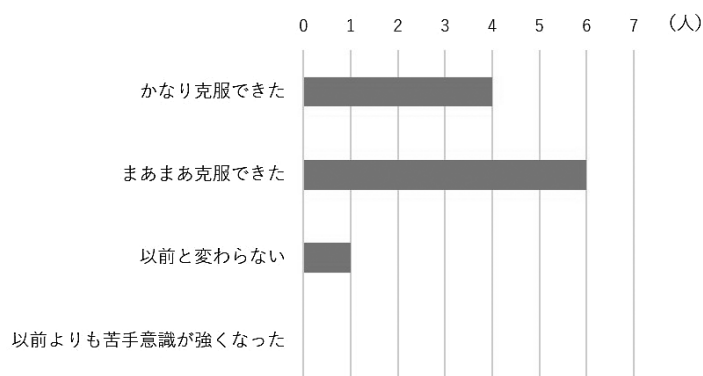
「人前で話すこと」に苦手意識があると回答した学習者は、今回の授業である程度苦手意識を克服できたと考えられるが、約30%の学習者が「以前と変わらない」と答えた。このことから、今回の学習の中心は作文を書くことであり、グループ内の質疑応答や、作文



【図7】「長い文章を書くこと」に苦手意識のある学習者の克服度

発表会では「人前で話すこと」の苦手意識を克服するまでには至らないことが示唆された。

「長い文章を書くこと」に苦手意識があると答えた学習者の中で、その苦手意識を「かなり克服できた」と回答したのは0名であった。ただし、「まあまあ克服できた」と答えた学習者が15名、「以前と変わらない」が1名だったことから、ブロックを用いた作文指導が長い文章を書くことに対する苦手意識を払拭することに、ある程度効果があると判断できる。



【図8】「頭の中のイメージをかたちにすること」に苦手意識のある学習者の克服度

「頭の中のイメージをかたちにすること」に苦手意識を持っていた学習者は一人を除き、今回の授業で苦手意識を克服できたと考えられる。特に「かなり克服できた」と答えた学習者の割合が【図6】、【図7】と比較して高く、ブロックによってイメージを体現化した効果が示唆された。

⑥ 理想のスーパービジネスウーマンの授業（全3回）についての感想を自由に書いてください。

今回の授業の目標に関連する学習者の感想を抽出し、原文のまま以下に示す。

<Iさん>

レゴと文章の両方を使って表現する新しい形態だったけど、理想のスーパービジネスウーマンという身近に感じられる題だったので、たのしかった。

<Jさん>

これまではイメージしたことを上手く表現することが苦手だったのですが、今回の授業で克服することができてよかったです。

<Kさん>

他の授業では体験できないような新しい方向の学びがあってよかった。他の人の発想力を文字として視認するのではなく、レゴブロックという形で見ることでとても面白かった。

<Lさん>

想像して作り上げることにとても苦手意識を持っていたけど、深く考えるより、自分のパッと思いついたものを作り上げたり文にしたりすることで楽しく授業ができた。

<Mさん>

自分の思い描く理想の姿をブロックでかたちにし、それを見てストーリーを作り上げるという流れがとても楽しく感じられました。なかなか自分の考えを周りに伝えられなかつ

たり、文章構成が苦手だったり、想像することが苦手だという人が多いと思いますが、レゴブロックを使うことで楽しみながら苦手克服にチャレンジすることが出来ると思います。また、自分の思うがままに作成し、正解不正解に囚われずにチャレンジできるので苦手と向き合ういい機会になるなど感じました。

<Nさん>

最初は難しいお題だと思っていました。でも、自分の中のイメージを形にするのはとても楽しかったし、作ったものから、さらにストーリーを考えていく作業も、本当に小説を書いているようで面白く、スラスラ出てきました。私たちの班は二人で、相手は二年生だった<sup>12)</sup> けど、二人でイメージを話し合う時間が本当に楽しかったし、学ぶことも多かったです。

<Oさん>

イメージを話すだけではなく形にもするという新しい取り組みで、初めてということもあり最初は何も思いつかなかったけど、何度かすることによって頭の中のイメージも前より明確になり、話す力にもなったと思いました。

<Pさん>

レゴ作品から自分で話を作って、班のみんなとの話を合体させたとき、すごく面白いストーリーが出来上がったのがうれしかったし、自分の想像を文章にすることの楽しさを知りました。

学習者の具体的な感想とアンケート結果を総括し、今回の授業の成果と課題を考察する。

Iさんが「理想のスーパービジネスウーマンという身近に感じられる題だったので、たのしかった」と述べるように、将来、事務職に就くことを希望している学習者の実態に応じたテーマを設定したことによって、意欲喚起できたことが今回の授業の成果の一つと考えられる。アンケート結果の楽しさ・熱意・満足度（【図1】～【図3】）が高かったこととの関連性も指摘できる。

Jさんが「イメージしたことを上手く表現することが苦手だった」と述べたが、【図4】から、Jさんだけでなく、多くの学習者が苦手意識を持っていることが明らかになった。そして、【図8】にあるように、今回の授業で「頭の中のイメージをかたちにすること」に対する苦手意識を克服できたと考える学習者が特に多かった。これは、Kさんが「他の人の発想力を文字として視認するのではなく、レゴブロックという形で見ることができた」と述べるように、ブロックを作ることによって、思考を体現化・可視化できたことに起因していると考えられる。ブロックを教材化したことによる成果が示唆された。

また、「自分のパッと思いついたものを作り上げたり文にしたりすること」（Lさん）、「自分の思うがままに作成し、正解不正解に囚われずにチャレンジできるので苦手と向き合ういい機会になる」（Mさん）という指摘は、あまり深く考えずに一旦文章を構成し、それを崩したり再構成したりすることの意義に気づいたものと考えられる。はじめから整った



長い文章を書こうとすると過度に緊張して書けなくなってしまうが、だいたいの論理を構築し、あとから全体調整するのであれば苦手意識が払拭される。【図4】において、「文章の構成を考えること」に苦手意識があると答えた学習者はそれほど多くなかったが、文章構成に苦手意識のある学習者の全員が「かなり克服できた」「まあまあ克服できた」と評価した。論理的な文章を書くことは、まさにブロックを作るときの工程と同じ手順であり、ブロックを用いた作文指導が文章構成を考える能力の向上に寄与する可能性が示唆された。

「イメージを話し合う時間が本当に楽しかったし、学ぶことも多かった」(Nさん)、「何度かすることによって頭の中のイメージも前より明確になり、話す力にもなった」(Oさん)の感想は、ブロックで体現化した考えを、話し合いによってより明確にし、言語変換できたことを示唆している。

Pさんの「班のみんなとの話を合体させたとき、すごく面白いストーリーが出来上がったのがうれしかった」という指摘は、コミュニケーション力や協調性の高まりを示唆している。しかし、【図6】より、「人前で話すこと」に対する苦手意識を克服するまでには至っていない。アンケート項目の立て方に問題があり、「グループで話し合うこと」という項目が直前にあったことで「人前で話すこと」はグループのような小人数ではなく、大勢の人前と学習者が認識していると考えられる。従って、この項目によってコミュニケーション力や協調性の検討をすることは難しいが、少なくとも自分の気持ちや意見を伝えることに対する苦手意識の克服には至らなかったと考えて良いと判断した。

ブロック制作によって個人のイメージが確立され、グループでの合意形成が図りにくかった今回の授業において、コミュニケーション力や協調性を働かせることができたかどうかは個人差が大きかったと考えられる。

このように、今回の授業の成果はブロック教材化による意欲喚起、ブロックによる思考の体現化・可視化、ブロックの構成をふまえた論理的思考、ブロックで体現化したことの言語変換であると考えられる。今後の課題は、コミュニケーション力や協調性が高まるのはどのようなときか考察し、どのように授業内容に組み込むか検討することである。

## 7. 小学校国語科への汎用性

最後に、小学校国語科への汎用性について述べる。短大における授業の成果から、ブロックを教材化して作文を書くという言語活動は、平成29年告示の小学校学習指導要領国語編における「B 書くこと」の「構成の検討」(指導事項イ)に活用可能であると考えた。

第1・2学年の「イ 自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」では、ブロックで形を作るのではなく、色に注目して「赤はりんご」「黄色はバナナ」などとすると構成を考えることができそうである。ペアやグループで「なぜここにりんごがあるの?」「バナナはその後どうなるの?」などと質問し合うことによって、学習者の思いや考えが明確になると考えられる。

第3・4学年の「イ 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること」では、段落ごとにブロックで作品を作り、その作品にタイトルをつけ、内容のまとまりを意識させると良い。つけたタイトルを伏せておき、ペアやグループで作品の説明をし合うことでタイトルを当てる方向性も考えられる。ブロック作品を並べてみて、何かまとまったストーリーが作れそうかどうか検討し、その際にどのようにブロックを崩して、どのように付け加えるか考えることによって、段落相互の関係に注目させることができる。

第5・6学年の「イ 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること」は、基本的に今回の短大の授業展開をそのまま活用できると考えられる。学習者が意欲的に取り組めるテーマを設定する点には注意が必要である。短大では「理想のスーパービジネスウーマン」をテーマにしたが、小学校高学年では「理想の中学生」に置き換えるなどすれば、文章構成や展開を楽しんで考えることができそうである。

このように、ブロックの教材化によって、現在の小学校国語科において課題となっている論理的文章を書く指導を行うことができると考えられる。

## 8. 総括

ブロックを教材化することで、短大生の課題であった「構成を考えて論理的な文章を書くこと」の克服の糸口をつかむことができた。ブロック制作を通して作文を書く授業では、学習者の意欲を喚起しながら、思考を体現化・可視化できた。また、ブロックを作る過程を文章構成に置き換えて論理展開を考えることができるという成果があった。この成果は、小学校国語科における「B 書くこと」の「構成の検討」（指導事項イ）に活用可能であると考察した。

## 謝 辞

レゴ® シリアスプレイ®がブランド論の授業でどのように扱われているかご教授いただいた金沢星稜大学経済学部経営学科野口将輝准教授に深く感謝申し上げます。

### 【註】

- 1) 筆者はNHKの地方放送局でニュースキャスターとして勤務した経験がある。
- 2) 国語教育指導用語辞典によると、話し言葉は「書き言葉に対立する概念であって、音声を媒介とする言語の総称である」(p.200)と説明されている。田近洵一・井上尚美(2009)『国語教育指導用語辞典』【第四版】教育出版株式会社。
- 3) 皆川晶(2016)「短期大学生による話し言葉と書き言葉の認識の実態について」近畿大学九州短期大学研究紀要46号, p.11.

- 4) 上掲書,p.11.
- 5) 西山悦子 (2021)「小学校国語科における『書くこと』の実践報告」全国大学国語教育学会第140回2021年春期大会（オンライン）研究発表要旨集, p.269.
- 6) 篠原京子 (2021)「小学校国語科『書くこと』における論理的思考力の育成－小学校からの小論文指導を通して－」東京未来大学研究紀要第15号, p.60.
- 7) 上掲書, p.60.
- 8) 株式会社ロバート・ラスムセン・アンド・アソシエイツ「LEGO® SERIOUS PLAY®?」 <<http://www.seriousplay.jp/seriousplay/>> 【2022年9月25日閲覧】
- 9) 町田守弘 (2022)「国語科授業開発の方略－中等教育現場での実践に即して－」早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究：人文科学・社会科学編70巻, p.140.
- 10) 「dotCampus」とは、金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部が導入しているe-ラーニングシステムである。
- 11) 前掲のdotCampusにおけるアンケートフォームに、今回の授業アンケートと感想を入力してもらった。
- 12) 日本語表現法Ⅱは、短期大学部1年次と2年次が混在していた。また、4人グループを基本としていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で欠席者が多く、2人で話し合ったものと考えられる。